



【要 旨】

鈴鹿本『今昔物語』の旧蔵者、鈴鹿連胤は香川景樹門の歌人であり、神道研究者としても高名であるが、その古典書写、蔵書家としても名だたる存在である。その曾孫である鈴鹿三七氏も蔵書家として聞こえているが、彼の家の蔵書は「鈴鹿文庫」として愛媛大学附属図書館に収まり、『大和物語』『日次紀事』『新撰字鏡』などが収容されている。しかしながら、連胤の事績については従来触れられることが少ない。本稿では、鈴鹿文庫及び連胤についての整理と、若干の報告を目的とする。

一 二つの「鈴鹿文庫」

二 鈴鹿連胤について

三 桂園歌人・連胤―その自筆資料―

一 二つの「鈴鹿文庫」

京都吉田神楽岡にある吉田神社の旧社家であり、吉田氏の家老的役割であった鈴鹿氏、及びその蔵書である鈴鹿文庫については、若干の注記が必要であろう。例えば、身近な辞典類を繙き、鈴鹿文庫についての記述を見してみる（傍線部は筆者、以下同）。

京都吉田神楽岡の吉田神社の旧社家の一氏。吉田神社預であった卜部吉田氏のもとにあつて、同社権預・祝・雑掌などの諸職につき、また吉田神道のなかにあつて、吉田氏の家老的役割を果たしていた。(中略) しかし、鈴鹿氏が一般に知られるようになったのは、吉田兼俱によつて吉田神道が興され、その神道界における位置が確立して以降のことであり、その吉田神道管領長上家の諸国神社・神職支配のための庶務を担当するようになったことである。また、吉田家にならつて、古典書写伝来の家としての功績がみられ、また一族中に『神社叢録』を著した鈴鹿連胤(一七九五―一八七〇)のごとき神道学者・国学者も出た。それより多くの蔵書をもち、鈴鹿文庫をもつたが、その多くは、第二次世界大戦後、近畿日本鉄道編纂室を経て大和文華館の蔵に帰した。

(「国史大辞典」鈴鹿氏の項)

後半傍線部の「鈴鹿文庫」について補足するならば、旧所蔵者は鈴鹿義一氏、その多くの蔵書が第二次大戦中に流失したが、大部分を近畿日本鉄道が購入、昭和二十一年に同社「編纂室蔵書目録」が編まれている。昭和三十六年に大和文華館に一括移管された。これが「鈴鹿文庫」である。

しかしながら、辞典という性格上、その簡便な記述からやや誤解の生じる可能性がないわけではない。鈴鹿氏で最も注目される人物は傍線部の連胤つらなであるが、「鈴鹿文庫」旧蔵者の鈴鹿義一氏とこの連胤は、もちろん同族ではあるが、別家である。つまり、いわゆる「鈴鹿文庫」と呼びうるものは、大和文華館所蔵のものとは別に、この連胤の家に伝わった蔵書が存在するのであって、「鈴鹿文庫」は一つではないということをまず確認したい。正確を期すならば、傍線部は「鈴鹿義一氏旧蔵分の多くは」という一語が必要であろう。

かくまで連胤という人物にこだわるのは、一般的に「鈴鹿本」の名を冠する書物の伝来に、この連胤なる人物が大きく関わるからである。特に京都大学附属図書館所蔵の『鈴鹿本今昔物語』を筆頭として、岩波古典文学大系底本の『大和物語』、近世の有職故実の基礎資料である旧西荘文庫本『日次紀事』など、そのすべてに冠せらる「鈴鹿本」の称号は、大和文華館所蔵の「鈴鹿文庫」のことではない。連胤およびその曾孫にあたる鈴鹿三七氏の蔵書であったがゆえに、「鈴鹿本」の称号を冠せられているのである。

鈴鹿連胤が『今昔物語』と深く関わっていることについてはあまりにも周知のことであり、平成八年度の京都大学附属図書館秋期展示「今昔物語集」への招待」の記事が当館のホームページにより容易に見ることができるので、ここでは詳述しない。要するに天保四年正月に小浜の国学者、伴信友が「奈良人某ノ蔵テル古本」であった異本「今昔物語集」を見ているが、その後その本を鈴鹿連胤が購入、天保十五年三月に、親友のよしみから信友が再び連胤所蔵と帰した「今昔物語集」を実見している。この信友の二度の「今昔物語集」の閲覧記録から、この異本「今昔物語集」は、連胤以前から鈴鹿家に伝来したのではなく、まして鈴鹿家で書写したものなどでもなく、奈良某家に長らく秘蔵されていたものを、連胤その人が購入した書物であったことが判明する。そして、その連胤購入本を曾孫にあたる鈴鹿三七氏が『芸文』誌上に紹介され、その後『今昔物語』の祖本として位置づけられ、京都大学に寄贈されたのである。

ところが、後述するように、神道でも輝かしい業績を残し、また景樹門下の有力歌人でもあったこの鈴鹿連胤は、神道関係の辞書類、及び和学関係の辞書類には当然立項されているものの、『今昔物語』のことには言及されていない。連胤は『神社叢録』の名著のあることをもって神道史では無視できない人物であることは確かであり、景樹門においても逸せざる人物でもあるが、それでも名高い『鈴鹿本今昔物語』がこの連胤に由来するとの一文があってもよさそうである。なぜならば、連胤の伝記資料のうちでもっとも詳細を極めるのが、曾孫鈴鹿三七氏の手になる「異本今昔物語集」（大正九年刊）に付された「鈴鹿連胤略伝」であるからである。神道、近世後期歌人、蔵書家、

この一見相容れないかに思われる顔をすべてあわせ持つのが連胤の実際であり、その総体を捉えた上で、改めて神道史もしくは和歌史における連胤の魅力が説かれるべきであろう。また、これも後述するが、国語学資料として注目されている『新撰字鏡』の流布についてもこの連胤が関わっており、その総体にはこの国語学上の業績をも加えるべきである。

さて連胤及びその曾孫たる三七氏の蔵書はその後、愛媛大学附属図書館に一括購入（一部寄贈）され、これもまた「鈴鹿文庫」と呼ばれている。すなわち「鈴鹿文庫」なるものは所有機関を異にして少なくとも二つが存在し、「鈴鹿本」なるものは更に別の所有機関に所蔵されているのである。先の『日次紀事』『大和物語』はこの愛媛大学の方の「鈴鹿文庫」所蔵本なのである。その他兼葭堂旧蔵の西順自筆『夫木和歌抄抜書』から宋版、春日版、変わったところでは奈良絵本の草稿、紙師「宗二」の名のある光悦本断簡などとても筆致に収まりがたい錚々たる書物がこの愛媛大学の方の「鈴鹿文庫」に収められている。鈴鹿三七氏については筆者ごときが駄文を弄するのは憚れるので、愛媛大学に入った経緯をも記された小泉道氏の文章を引用させていただく（愛媛大学附属図書館「図書館だより」四号。昭和五十三年三月）。

連胤の四代あとが三七氏で、京都大学で国文学を専攻して皇學館教授などを歴任、関西の書誌学の開拓者と称されて関係著書も多く、昭和四十二年に七十九歳で逝去。その夫人が元本学図書館長井手淳二郎先生の令妹に当たるという縁もあって、その蔵書が本学に一括購入（一部寄贈）されることになり、これを「鈴鹿文庫」と称することになったのである。

前述の大和文華館所蔵の「鈴鹿文庫」の方が先に存在していたので、愛媛大学に入った三七氏旧蔵本は「愛媛大学鈴鹿文庫」と称する方が妥当であり、誤解を招かないと思われるので、本稿では煩瑣ながらこの称を用いる。ちなみに「国書総目録」に「鈴鹿」とあるのは、大和文華館所蔵鈴鹿文庫のことで、愛媛大学鈴鹿文庫は当然ながら同書には採録されていない。

愛媛大学鈴鹿文庫の概略についても、小泉氏が簡略に紹介されている。すなわち、

- 一 神道・国史関係では、卜部神道の家系なるがゆえに質料とも揃い、「日本書紀」「中臣祓」「古語拾遺」の写本や版本は特筆に値する。
- 二 景樹を中心とする和歌資料。
- 三 物語、小説、日記随筆類の写本、版本。
- 四 書誌学関係。また、各資料の伝来の三七氏自身のメモ。
- 五 その他

の五分類に総括できる。加えるに、先に挙げた書名以外では、藤井紫影翁との関係から秋成周辺資料、変わり種としては増穂残口、平賀源内、狂詩なども特筆しておくべきであろうか。その資料の扱いで留意しなければいけないのは、その資料が愛媛大学鈴鹿文庫に収まっている過程である。鈴鹿家が古書の書写に努めた家であることから、短絡的に古写本を鈴鹿家歴代の伝来と断を下すのは早計である。例えば『方丈記』の異本が比較的まとまって収まっているが、それらにしても、鈴鹿家に長らく伝来したものの、連胤が集めたもの、三七氏が集めたものでは、性格が異なっている。

『今昔物語』にしても、鈴鹿家だから伝来したのではなく、連胤が幕末に奈良の某家から購入したものであって、吉田家に仕える鈴鹿という家の本来の役割から収集したのだとは認めがたい。京都の年中行事を記す『日次紀事』も、もともと鈴鹿家に伝来したのではなく、三七氏自身が希求してやまなかった書物であって（黒川道祐著「日次紀事印刊本考」、『皇學館大學紀要』第五輯）、鈴鹿家であるから伝来したものではない。あくまでも愛書家の収集熱ゆえに入手されたものである。神道の家であること、吉田家に仕えて書写に務めた家であることを、実体不明のままに過大評価してはならないと思う。少なくとも鈴鹿家伝来のもの、連胤が集めたもの、三七氏が集めたものを峻別して扱う必要がある。本稿では、その中で連胤に注目して、彼の伝記を整理したうえで、その自筆資料について二、三を考察することで、その文事やありかたについて報告したいと思う。

二 鈴鹿連胤について

鈴鹿三七氏は「異本今昔物語集 附鈴鹿連胤略伝」を上梓するに際し、「緒言」の中で、次の一文を草している（句読点は筆者）。

自分は非才でありながら学問を志したのは全くこの曾々父の感化で、積書以遺子孫子孫未必能読と古人がいつたやうに、全く万巻の遺書を紙魚の餌に与へて一読もせぬやうなことでは誠に相済まぬ訳である。

これによれば、三七氏のありかたは曾祖父の連胤に影響されてのようである。そもそもこの「異本今昔物語集」の上梓自体が、連胤没後五十年を記念したもので、限定百五十部、巻頭に連胤の自筆と肖像を掲げ、田中教忠翁の連胤追懐記を合わせ載せるなど、まさに連胤追悼の上梓であったと言ってよい。連胤の友人の詩人、北脇淡水の命名による舎号「尚聚舎」の印をその冒頭に捺し、緒言に「京都神楽岡西麓尚聚舎にて 鈴鹿三七識」と記すことから、その曾祖父への追慕の深さがうかがえよう。

連胤については「あしたの露」が『桂園叢書』第三輯に収められ、主著『神社覈録』

が早くに活字化され（明治三十五年会通社、昭和四十六年思文閣から復刻）、伝としても佐伯有義氏「鈴鹿連胤翁の伝」（明治三十四年「全国神職会会報」第二十七号）があり、種々の人名辞書類にその名が記されているが、やはり詳細を極めるのは三七氏の「鈴鹿連胤略伝」（大正九年）である。今、新たに加えるべき用意はないので、全面的にこれらにより、まず連胤の伝記を整理しておく。

鈴鹿家の鼻祖は、壬申乱で死亡した右大臣中臣連金の男吉子連で、そのため、連胤も中臣と鈴鹿とを名乗った。寛政七年十月二十九日に生まれる。父は隆房、母は立入左京亮経康の娘である。幼名を幸松、号は誠斎、舎号は尚聚舎。

父の隆房も好学の士で、小野蘭山門で本草学を修めたが三十三才の若さで世を去り、同族鈴鹿通益を後見として、祖母と母の手により育てられた。前掲の佐伯氏の記事によれば、この祖母が学問に通じ、子守歌がわりに「大学」「中庸」などを口授したところ、幼き連胤はこれを暗誦したという。その後、吉田家の儒者松岡仲良に漢籍を学び、山田以文に国学を学んだ。後に三七氏が山田以文関係の書籍を求めたのも恐らくはここに起因すると思われる。文化年間末頃、すなわち二十歳頃に近村岡崎の香川景樹の門に入り、和歌を学んだ。手元不如意の景樹を経済的に援助したと伝えられているが、連胤の和歌については後述する。天保七年、思うところあって吉田家を致仕し、以後学問に身を委ねるようになった。没年及び享年については、各辞書類の記載にばらつきがある。明治四年一月五日、享年七十七とするものが多いが、これは連胤の死が発表された年次で、実際は明治三年十一月二十日に没している。年齢は表向きが七十六歳であるが実年齢は七十二歳であった。吉田家より成功いさを霊神と諡号された。

経歴は、文化六年に従五位下、神祇権少祐に任ぜられ、同八年に従五位上に進み神祇少祐に転じ、同九年に筑前守に任ぜられ、神祇権大祐に進む。ために筑前守を称することも多い。同十三年吉田社権祝、正五位下に進む。文政元年には卜部に改姓。これは龜卜の行事に参加するため中臣姓から卜部へと改めたので、同七年には中臣姓に復している。この改姓、復姓は計四度に及んでいる。同年に従四位下、天保四年権少副、天保七年に吉田家を致仕し『神社覈録』編纂に専念するが、同九年に従四位上、安政元年に正四位下、吉田社正禰宜、同年六月吉田社権預、慶応二年に従三位に進んでいる。鈴鹿家は代々正四位下を最上と定められていたので、連胤は自分が従三位にまで進んだことに大いに感激したと伝えられている。その理由としては、吉田神社の経営復興に私費を投じ、春秋二期の官祭復古に務めた功によるものであった。

神道関係の業績では、やはり後半生を費やした『神社覈録』を筆頭に挙げるべきであろう。本書は天保七年に編輯を決意、明治三年に成稿、延喜式内の神社を中心に、式外の著名な神社をも加えて、多くの史籍を渉獵して国別にまとめたもので、記述の不統一もしくは脱文、引用書目の不適切などの指摘はあるものの、その精細な考証は「世の学者之を尊重せざるはなし」（明治三十五年版『神社覈録』跋）と評価されている。また、巻一の「神名帳」総説も「諸国の神名帳も、現存するものは悉く之を収載せられたり」

(同右)と許され、愛媛大学鈴鹿文庫にも多くの「神名帳」が収められている。その他、私費を投じて大和、河内の皇陵を踏査し、三條実方、柳原光愛、戸田大和守、谷森善臣らと復旧に務め、前述の吉田神社復興と祭礼の復活に尽力したことが知られている。この踏査記録は焼けてしまったらしく、その関係資料は愛媛大学鈴鹿文庫にはわずかしかなかった。されていない。

勤王の志士とも交わりが深く、吉田松陰の「留魂録」には連胤とその子の長存が記されていると言う。他に小林民部大輔、西川善六、小河弥右衛門、矢野玄道、八田知紀らとの交わりが深かったが、子孫に災いの及ぶことを恐れて悉く焼き捨てたらしく、愛媛大学鈴鹿文庫にもほとんど収められていない。

連胤の素行及び性格についても、やはり一癖ある人物であって、三七氏が懐かしく偲ばれている。

曾々父は平素独歩の時には、深き漆塗の笠を被り、冬期は毛の附着してゐる猪脊を履き、頗る異様な風であった。全体着衣については無頓着で、他出の折など強いて着替を勧めると之を着はするものゝ帰宅後もそのまゝであつて紋付羽織の袖で口の辺を拭ふなど随分家人を困らせて平然たるものであつた。道中で驟雨に遇つても決して歩をゆるめる事はしなかつた事などは今尚実見者の物語るところである。

他にも所領地の四方に地蔵を安置し水田を守らせたり、一子が痘瘡を病んだ際に、妻が内密で僧侶に祈禱を頼んだ折に帰宅した彼は、仏供を蹴散らし大喝したという話も残されている。

学問態度もこれまた尋常ではなく、九人の子女を膝にかき抱くことなく明暮れ書齋に引きこもり、こと学問の談話に及べば、幼子を連れていようと時を忘れて長談義に没頭し、戦火が迫つても読書三昧に耽つていたようである。

当然、かかる人物には同好の諸士が群がり、その交際範囲は広く、それが蔵書の豊富さとも無縁ではありえない。

連胤は佐々木竹苞楼の顧客で、おもに研究上の書物をかの書肆から入手しているが、それ以外には柳原、西三條の両家から古記録を借り出し、その書写に務めた。また、穂井田忠友、伴信友、六人部是香は最も昵懇であつたようで、「ならや」と称されて正倉院文書の整理で名高い忠友、稀書珍籍を通報し、その影写をもたらしただようである。恐らくは奈良某家に所蔵されていた「異本今昔物語」が、信友が一覧した後に連胤の手に帰すのもこういった事情によるのであろう。

その膨大な書物は、必要があれば借覧を許可していたようで、田中教忠は「同卿(筆者注、連胤)ノ蔵書ヲ自由ニ閲覽スルコトヲ得タルノミナラズ借覧スルコトスラ許サレ

タリ」と感激をもって自身の体験を踏まえた上で、「他ニ於テモ熱心ノ希望者ニ対シテハ愛蔵ノ珍書モ貸与ヲ乞フニ快諾アリシコト近世ノ愛蔵家ノ通例ニ非ザルヲ追想シテ記之」と評している（「田中教忠翁追懷記」、前掲「異本今昔物語集」所収）。事実、頼山陽が『日本外史』執筆に際し、連胤より書物を借り出している。

以上、愛媛大学鈴鹿文庫の中核をなす連胤について略記したが、連胤の文事及びその蔵書を考えるには、研究上に必要な書籍の収集、柳原や西三條両家の古記録の書写、皇陵調査記録、知己の縁からの収書、桂園派和歌資料の五方面の活動をひとまず押さえる必要がある。しかし、ことはそのように簡単ではない。前掲記事において佐伯氏が「然るにその書嘗て官命より、数百巻の蔵書と共に左院に出だしおきしに、皇宮炎上の時類焼せしは、かへすがへすも口惜しきことになむ」と証言しているからである。「数百巻」を少し差し引いた上で、この言が正しいとすれば、愛媛大学鈴鹿文庫本以外にも、さらに連胤所蔵の書物が存在していたことになる。しかもそれらの書物には、恐らくは皇陵調査記録と柳原、西三條家所持の古記録類が多く含まれていたと思われる。その焼失した書物を想定するという困難を脳裡に入れながら、連胤の蔵書を考えなければならぬのである。

最後に鈴鹿三七氏が挙げられた連胤の交友を、前述との重複も含めて列記しておく。矢野玄道、岡崎修蔵、賀川玄吉、北浦定政、西川幸輔、羽田野敬雄、御巫清直、頼杏坪夫妻、小河一敏、狩谷掖斎、平田篤胤、屋代弘賢、黒川春村、木村正辞、戸田保遠、中西久受である。また、天治本『新撰字鏡』巻二、四も連胤が入手して以来次第に流布し（川瀬一馬氏「古辞書の研究」）、江戸で流布したのは連胤と木村正辞の筆写に負うものであったことも知られている。

三 桂園歌人・連胤―その自筆資料―

鈴鹿連胤が近村岡崎の香川景樹の門に入った時期についても諸説ある。基本的には享和頃から文政十年までの『桂園入門名簿』が焼失したので推測の域を出ないが、三七氏は前掲「鈴鹿連胤略伝」に文化末頃、すなわち二十歳頃からとされる。一方、兼清正徳氏は文政六年以前だとされている（「人物叢書「香川景樹」」）。この両様の記述は大雑把に言えば矛盾がないが、例えば文政十年四月十八日に頼杏坪夫妻が上洛した際には、連胤宅で桂園社中の当座歌会が開催されているらしいので、やはり三七氏の言う文化末頃の入門が実情に近いのではないだろうか。実力の程は、天保十年『京都臨淵社相撲番付』がしばしば引かれ、東前頭あたりに位置づけられているので、そのおおよそを知ることができる。しかし、いかがであろうか、この番付はしばしば景樹門の実力を測る際に用いられるが、かかる番付をもって歌人の力を即断してよいのだろうか。むしろ、連胤の場合は、佐伯有義氏「鈴鹿連胤翁の伝」に言う「香川景樹は家計頗ゆたかならざ

りしが、翁の恵によつて苦境を免れしこと屢々なりきといふ」という記事の方が注目されるべきであろう。前述のように、連胤は吉田神社再興、皇陵調査、志士援助などに私財を投じるといふ性格であつて、この記事は事実としての可能性が高い。先に連胤の入門時期を問題としたのも、この事実との関係からである。景樹が生活に苦勞していたのは周知の事実であるが、文化年間から活躍がはじまり、文政元年には江戸に下るも失敗、京都に戻つて子弟の教育に力を注ぎいわゆる桂園派を確立したと言われている。連胤がこの江戸下り前の門人であるのか、京都に戻つてからの門人であるのか、そのいずれかを定めることで連胤の位置づけがおのずから異なつてこよう。本稿では、三七氏の説に従い、江戸下り以前から、すなわち桂園派形成以前から物資的に景樹を支えた人物として連胤を位置づけておきたいと思う。ちなみに『桂園宗匠撰草稿』には連胤の和歌が五十二首（内、恋歌三十二首）採られている。

その関係から、愛媛大学鈴鹿文庫には景樹及び桂園派の資料が比較的まとまつて入っている。気がついたところでは、赤尾可官のものが比較的まとまつている。赤尾可官は林丘寺宮家家司、閑院宮美仁親王に歌を学び、後に景樹の門人となつた。木下幸文を景樹に紹介した人物として知られている。その自筆資料が若干あるが、見るべきもの少なくはない。例えば、初めて幸文と景樹が歌合を興行したのが文化三年三月十五日『桜十番歌結』で、評者が可官であるが、その一本が愛媛大学鈴鹿文庫に見いだされる（内題「三月十五日当座十番歌結」）。この『桜十番歌結』は「桂園叢書」第二輯に収められ、たびたび引用されるが、愛媛大学鈴鹿本とは本文に異同があり、いくつかを例示してみると（傍点筆者、「桂園叢書」本は、便宜上兼清正徳氏「木下幸文の研究」に拠る）、

● されど春の始にはや盛過ぎたる花の侍ることすこし本意なきやうに侍るに

（「桂園叢書」本、冒頭歌合評）

● されど巻の始にはや盛過ぎたる花の侍ることすこし本意なきやうに侍るに

（愛媛大学鈴鹿文庫本）

目馴れたるなみかと思ひ侍ちしかと

（「桂園叢書」本、五番歌合評）

目馴れたるなみかと思ひ侍りしかと

（愛媛大学鈴鹿文庫本）

という異同があり、兼清氏が「マヽ」を付された箇所も意味明瞭で、文脈としては愛媛大学鈴鹿文庫本の方がよいようである。また、九番歌合の評は、一度評が終わつてから「桂園叢書」本では「此評あやまれり」として前評を否定するが、少し意味が通りにくい。愛媛大学鈴鹿文庫本ではこの箇所は「後云、此評あやまれり」とあつて、可官が後

に再考して評を改めた事情が記されている。さらには、彼の書き込みもあり、愛媛大学鈴鹿文庫本の方が資料性が高い。

次いで、鈴鹿連胤の自筆資料であるが、この判定にはある種の困難がある。前述のように、連胤の著したものは焼失したものが多く、三七氏自身も「曾祖父はその後半生を神社覈録の編纂に没頭したのであるから他にこれとて纏まった著述はない」と述べられているように、存外に僅かしか残されていないようである。その反面、連胤の署名がなくとも、連胤が書写した古典籍が多くあり、それをいかに確定していくかという問題がある。例えば、前述の天治本『新撰字鏡』の幕末写本の端本五冊（篇立、卷一、二、四、十二）が愛媛大学鈴鹿文庫には現存し、それらには連胤所蔵を示す「尚聚舎蔵」の印が捺されており、連胤の手による書写と伝えられている（鈴鹿三七氏「新撰字鏡に就て」、「書籍」第三号）が、連胤の署名はない。また、別に明治十三年に内務省から『新撰字鏡』二冊を献上したことを讃える鈴鹿義鯨氏（三七氏の父）宛て有印文書も残されており、この鈴鹿家から内務省に献呈された『新撰字鏡』二冊と、現存本五冊との関係も不明である。鈴鹿家から内務省に献呈された『新撰字鏡』は連胤筆写本なのか、それとも原本なのであろうか。その判断がつきかねるほど連胤の筆写は鮮やかであり、巧みであって、判断には慎重な手続を必要とする。本稿では、ひとまずこれらの存疑資料はとりあげず、連胤自筆と確定しえたものから文学関連資料の二、三を紹介することで、連胤の文事について概観する。

嘉永三年七月二十四日に連胤が写した『伴氏稿目』は、伴信友の著作稿本目録である。伴信友は前述の『今昔物語』に関わった人物であり、連胤の親しく交わった人物であり、『新撰字鏡』の流布にも関わっている。連胤はやはり、この信友の著述には関心が深かったようで、やはり彼の著述は看過できなかったようである。また「右以谷森氏本書写訖」とあって、やはり連胤と親しかつた谷森善臣の所持本を写したらしく、信友、善臣、連胤という当代を代表する古文書研究者の熱いつながりを知ることができる。その内容は、「国学者伝記集成」記載分よりは量的には少ないものの、その書き留める書名に異同があり、『馬射式沿革考』『五国古文書』などの他には見いだしがたい書名を記していることに特徴がある。

有署名では「右一卷以江戸湯島狩谷氏望之藏本書写訖」という識語を記した文政十一年十一月十一日書写の『土佐日記』がある。この『土佐日記』は江戸田安家本の書写であるが、連胤にとって、かかる古典の書写は日常のことであつたはずで、わざわざこの『土佐日記』に署名した理由は不明である。狩谷掖斎は連胤と親交のあつた人物であり、その関係からの営為であろうが、一つ気にかかるのは景樹との関係である。景樹に『土佐日記創見』の著があるが、その成立は文政六年、出版が天保三年である。前述のように、連胤はこの時期には既に景樹に入門しており、あるいは、景樹の研究に供すべき書写でもあつたのだろうか。

しかしながら、鈴鹿連胤をとりまいた文人の交流を最もよく示しているのが『都の

つと』(文久三年成、写本一帖)である。これは大和高田の堀江宗之が都を去る際に作成されたもので、厳密には堀江宗之の交遊を示す資料ではあるが、連胤も和歌を寄せ、後に鈴鹿家に入ったことから考えて、連胤の交友関係と重なるものと思われる。寡聞にして他の所蔵を知らないが、すべて自筆で綴られるこの一帖、成立事情から察して恐らくはこの一帖のみが作成されたにすぎないかとも思われるので、本書の紹介を以て本稿の結びとしたい。

本書に詩文、和歌、句、画を寄せた人物を列挙してみれば、六人部是香(序)、養素(四言四句)、景恒(和歌)、有節(句)、種松(和歌)、千益(和歌)、直令(和歌)、翠雨(和歌)、完和(和歌)、春翠(画)、淡節(句)、延之(和歌)、景嗣(和歌)、忠秋(和歌)、蓮茵(和歌)、享寿(和歌)、直躬(和歌)、東蔭(和歌)、ちか子(和歌)、蒼生雄(和歌)、祐以(和歌)、菓沢(画)、美蔭(和歌)、連胤(和歌)、景麟(画)、長憲(和歌)、三屋(和歌、画)、行納(和歌)、重郷(和歌)、秀香(和歌)、春香女史(画)、碧雲山人(画)、弘遠(和歌)、百僊(画)、多豆伎(和歌)である。

掲載人物のすべてを記すのはあまりにも煩瑣であるので、おもな人物について略述する。序を与えた是香は平田篤胤門の重鎮にして、歌学に長け、この頃には家塾を開き、物集高見などを指導した。景恒は景樹の長男、有節は関西旧派俳人の大御所である。種松は前述の如く連胤と皇陵を調査した谷森善臣、千益は東寺の公人で景樹門の疋田翠雨である。翠雨は後藤松陰門で、柳川星巖に漢詩を学び家塾を開いていた。淡節は伊予松山の人、梅室門の内海愛之丞で、一時桜井姓と相応軒を継ぎ、梅室の子を養育した。延之は歌学教授河本延之、景嗣は五世梅月堂、忠秋は景樹門の渡忠秋で歌道御用掛をつとめた。蓮茵は和歌に長じた高樹院の拝郷蓮茵、祐以は福田美楯の次男で京須賀社中の歌会を営んだ赤松祐以、景麟は『皇都書画人名録』(弘化四年)に「故景文先生門人」として記される鎌田景麟であろうか。末尾の多豆伎は、河内の人で岩崎美隆や村田春門、嘉言に和歌を学んだ中西多豆伎である。

所載の人物の多くには、居所を記した付箋がつけられ、その殆どが当時京住である。まさに和歌、国学、漢詩、俳諧、画を包括した時代を代表する京都文苑と認めてよく、連胤もその輪の中に確かにおり、執筆のかたわらかかる文人との交流を楽しんだ様子がよく示されている。連胤の交友関係は、古文書調査、神道、桂園だけではなく、当然ながら京都を中心としたもう少し幅のあるものであった。

その他、連胤の資料について紹介すべきものもあるが、一応古書収集、歌学、文人との交流のおおまかな概観は上記資料によって知ることができると思われるので、上記資料の紹介をもって筆を擱きたい。連胤の和歌の魅力や桂園派の中での精緻な位置づけについては稿を改めるべきであろう。

「鈴鹿文庫」及び鈴鹿連胤については、特に『鈴鹿本今昔物語』だけが突出している観が否めないもので、今一度の再認識が必要であろうと思われる。本稿で触れた神道、歌学、古文書収集から『新撰字鏡』という国語学資料、そして本稿では触れなかった『日

本紀』『中臣祓』『古語拾遺』などの総体を正しく捉えた上で、連胤自身の再検討が迫られていると思われるのである。なぜなら、鈴鹿連胤の関わった事柄のうちのいくつかが、明治から昭和にかけての学界の動きに連動するのは、まさに巨星鈴鹿三七氏が曾孫として登場するからではあるが、その三七氏のありかたにもっとも影響を与えた連胤自体が魅力あふれる愛書家であったからである。例えば加藤枝直自筆の『古今和歌集序』が愛媛大学鈴鹿文庫にあるが、このことをもって枝直と景樹の『古今集』をめぐる問題から、連胤がこの書を求めたとするのは正しくない。この書は昭和三十四年に三七氏が枝直の後裔から入手されたものである。その意味ではこの書は連胤と全く無関係なのだが、三七氏の手はこの書が帰すのは、やはり曾祖父という「因」があつての「果」であろう。またその奇しき縁、本との出会いも連胤に引かれてのことであろう。その理解の上に立って『今昔物語』や『新撰字鏡』『大和物語』『日次紀事』が鈴鹿家に伝来するに至る経緯、それらの書物の伝来を考慮すべきであろう。

最後に、愛媛大学鈴鹿文庫の現状について触れておく。愛媛大学鈴鹿文庫は愛媛大学附属図書館に収められているが、残念ながら恵まれた保管状況にあるとはいえない。鈴鹿家歴代の書写、連胤による塊集、三七氏による収集を経て、かくまで充実した文庫ではあるが等閑視されていると言ってもよい。もちろん保管環境の問題もあるが、「鈴鹿文庫」についての認識が周知されていないこともその要因の一つであると思われる。本稿をなす所以である。